

3. 開会のあいさつとこれまでの経緯

宇都宮大学国際学部教授 高際澄雄

最初に、講師をお引き受け下さいました渡良瀬研究会副代表の赤上剛先生、韓国円光大学校教授、朴孟洙先生、そして宇都宮大学国際学部教授丁貴連先生に心より御礼申し上げます。

講演の予定を掲げていた布川先生ですが、11月14日に奥様から講演ご辞退のお手紙をいただきました。今年の9月に資料を鑑定していただくためにお伺いしたときは、お元気でご講演に大変意欲的でしたが、10月に入院され、11月27日に亡くなられました。(スライド) この写真は、2007年に布川先生のお宅に伺って、谷中村事件と田中正造との関係についてお教え頂いた時撮ったものですが、先生には様々な場で、ご指導いただきました。足尾銅山鉍毒事件と田中正造のご研究に基づいて、啓蒙活動を続けられておられました。私たちがどれほど多くを先生から学んだかわかりません。これまでのご指導に心から御礼申し上げますとともに、先生のご冥福をお祈りいたします。

さて、私たちの多文化公共圏センターは、何を目的としているのか、皆様方には分かりにくいと思います。公共圏というのは、ドイツの社会学者ユルゲン・ハーバマスが、「多様な意見を集約して、合意を形成する場」を指して、使った言葉です。ハーバマスは、なぜドイツが2度も大戦を引き起こしたのかを研究して、イギリスの市民との違いに着目しました。18世紀のヨーロッパでは公共圏が成立し、特にイギリスでは、17世紀の末からロンドンにコーヒーハウスができ、そこに人々が集まっていろいろな意見を交換する、あるいは1695年に検閲法が延長されずに、多くの日刊新聞が発行されるようになりました。その情報に基づいて経済活動が活発になる、あるいはその後雑誌が発行されるようになって、ますます情報が豊かになり、いろいろな論争が起きる、こうしたことがイギリスの市民層を作った、だから公共圏は大切だ、というのがハーバマスの考えです。

私たちも、このような公共圏をつくろう、ただし現代にふさわしく多様な文化を持った市民が意見を交換する多文化公共圏をつくろう、ということで、多文化公共圏センターを設置しました。グローバル化した現代に合った支援をしようということで、HANDS プロジェクト、すなわち就学に困難を抱えている外国人児童生徒を支援をするプロジェクト、それから福島妊産婦乳幼児支援プロジェクト、すなわち福島原発事故の放射能汚染で苦しんでいる妊産婦や乳幼児を支援しようということで始まりましたが、今では栃木県の北部の妊産婦や乳幼児も放射能汚染で苦しんでいることが分かりましたので、今では県北にも拡大して支援する、このようなプロジェクトを実施しています。

今回、シンポジウム「田中正造とアジア」を企画した理由には、個人的な理由と学問的な理由の2つがあります。

私個人の理由として、この会場から約4キロの場所で生まれ育ちました。それから家族が田中正造の記憶をもっていました。さらにこの地域が田中正造と深い関わりがありまして、私個人渡良瀬遊水地の自然を守る運動に1991年以来参加してきました。

学問上の理由としては、環境科学が進歩してきたことと、今日お話いただく方々に見られるように、近年田中正造の研究が進歩してきたという現状があります。以上の2つの理由から、本日のシンポジウムを企画することになりました。

少し詳しく説明したいと思います。私が生まれ育って、中学生まで住んでいた場所はここから4キロほど離れた赤麻地区の悪戸というところでした。(スライド)これが地図ですが、ここが渡良瀬遊水地で、今私たちがいる会場がここになります。そして私が生まれ育った悪戸という場所はここになります。私が生まれた家から当時は遊水地がよく見えましたが、しかし当時は遊水地とは言わずに「ヤ」と言っていて、「ヤ」で遊ぶ、「ヤン中に行ってくる」というようにして中学生まで育ちました。

それから祖母高際スイは、部屋の帯刀(たてわき)という悪戸と遊水地を隔てた東の地域で生まれて、(スライド)この場所ですね、当時石川沼とかいろいろな沼がありましたが、そうしたところで泳いで遊んだと言っていました。それから田中正造を見たと言っていました。10才の頃、人力車に乗っている羽織袴姿の正造さんを見たそうです。正造さんは、よく家々でご馳走になるのでいつも箸を持っていたとも言っていました。それから当時は菅笠づくりが盛んで、乾燥しないように土で「ムロ」という菅笠づくりをする場所を作って女性たちが作業をしていましたが、そこでおしゃべりをしながら菅笠編みをする楽しさを語り、若い男たちが遊びに来たんだなどと言っていました。

母の高際良子は、16才で検定で小学校の教師になった人です。最初の赴任地は塩谷でしたが、次の赴任地が下生井小学校で、昭和14年の4月から昭和17年の3月までおりましたが、昭和16年の大洪水を経験しています。大変な洪水だったと言っていました。それから母の正造に関わるもう一つの大きなことは、近所の関口コトさん、近くでお茶屋さんをしていましたが、この関口コトさんが谷中村強制破壊の経験者であるということを見つけました。(スライド)これが関口コトさんです。旧姓を水野と言いまして、10才(数え年)の時に強制破壊を体験しています。私もお話を聞きましたが、雨が降っていて、家の材木が移動され、その材木を解いたら、ヘビが出てきたんだよと言っていました。昔はヘビを守り神として大切にしていました。それから田中正造が不憫がって、「コトちゃんを養子にする」と言っていたので、正造が来ると連れて行かれると思って、怖くて隠れていたということも言っていました。母はこのことを見つけて、近くの谷中村遺跡を守る会の針谷さんに連絡し、新聞で報道され、NHKでも放送されましたが、母はこのことを見つけたのが自慢でした。

私の父高際賢重(けんじゅう)は、赤麻のことをあまり語りたがりませんでした。母は、

あまりいい思い出がなかったからだと言っていました。父が生まれたのは大正6年ですが、翌年の7年に渡良瀬川が赤麻沼に入り、だんだん赤麻沼が小さくなって、赤麻が衰退していく、それを父は見ていたことになります。高等小学校を出ると、父親の正重（しょうじゅう）と母スイ、それに妹と東京にでて行きます。丸の内ホテルに勤めながら夜学に通い、やがて召集令状が来て、タイとビルマを結ぶ鉄道建設に従事し、インパール作戦が敗れると、バンコクで1年抑留されて、昭和21年11月に復員しました。楽しみにしていた父との再会は、帰宅1週間前に父が亡くなったので、果たせませんでした。そういう思い出があって、赤麻の思い出はいやだと言っていたそうですが、最近『藤岡史談』という古文書の研究会の機関誌に、「赤麻沼の買収について」という文章を残していて、今となっては貴重な資料になっていて、やはり赤麻のことをいろいろ考えていたことが分かりました。

それから村の人々は、ことあるごとに「田中正造の言うとおりにしていれば今は赤麻も違ったのに」と言っていました。

私は個人的には、渡良瀬遊水地の自然保護運動に取り組んできました。昭和64年（1989年）に江川一般廃棄物処分場の拡張計画が出され、ここに来ておられますが、大塚明さんが反対運動を始められました。それに平行して、翌年に猿山先生の呼びかけで「水土と緑を考える会」結成し、会長の町田武士さんを中心に、寺内さん、岩本さん、藤倉さん、佐藤さんと渡良瀬遊水地の自然保護運動を始め、1995年くらいまで自然観察会、展覧会、シンポジウムを行いました。その後、私は国際学部が作られ、仕事が忙しくなって、運動に参加することができなくなってしまい、「渡良瀬遊水地を守る利根川流域住民協議会」に運動を渡すことになりましたが、ゴミ問題に関しては今でも、「ゴミ問題を考える栃木県連絡会」に関与し、そこで書記長を務めています。それから3年前にいよいよここがラムサール条約に登録される可能性が出てきて、再び大塚さん、岩瀬さん、石川さんと「藤岡町自然を守る会」の運動を再開し、ラムサール条約登録のため、多くの団体と協力して、2012年7月、ラムサール条約登録が実現しました。

このような経験を通じて、田中正造の社会運動家としての生き方が分かるようになり、6年前宇都宮大学で、新入生セミナーとして「田中正造と渡良瀬遊水地」というクラスを立ち上げました。3年前、カリキュラムの変更でこの新入生セミナーが廃止されることになったとき、同じようなクラスをもっていた農学部の大栗行昭教授と協力して、教養教育科目として「栃木県の歴史と文化」という授業科目を作り、足尾銅山鉱毒事件と谷中村事件の歴史的側面の講義を大栗先生が、渡良瀬遊水地の自然環境問題について私が、講義することにしました。そしてこの3年、大栗先生から多くのことを学ばせてもらいました。

この授業を通じて、学問上の問題点が明らかになってきました。田中正造の有名な言葉に「真の文明は、山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」がありますが、私はこの「殺さざるべし」という言い回しにひっかかっていました。「殺してはい

けない」という命令形ですが、本当にそうなるのだろうか？これは理想主義に過ぎないのではないかと私は考えていました。

この文明という言葉は、福沢諭吉が翻訳のときに作った言葉で、その元になったのは、**civilization** という英語です。この英語自体が比較的新しい言葉で、18 世紀の中頃、1750 年ころにできました。辞書で有名なサミュエル・ジョンソンは、自分の辞書には載せましたが、あとで「**civility** という言葉があるのだから、**civilization** は削除しようかな」と話したと伝えられています。これくらい不安定な状態にあった言葉ですが、意味は **civis** 市民から派生した言葉で、市民は都会の住民ですから、市民化する、つまり都会化すれば自然を破壊するのは当たり前だろうと私には思えました。

しかし、環境科学が明らかにしたのは、文明が必ずしも自然環境を破壊するわけではないということです。一つは土壌科学です。文明が土壌侵食を進めた例としては、ギリシア・ローマ文明が有名で、森林伐採や過剰耕作によって、土壌侵食を引き起こし、文明の衰退を引き起こしたわけですが、モントゴメリーの『土の文明史』には、17 世紀オランダの人々が土を作り始めたことが書かれています。またダーウィンの最後の研究はミミズが土を作り出していることを明らかにすることでした。近代文明だけでなく、古代文明でもブラジルに豊かな土壌テラ・プレタを作り出した人々がいました。文明は自然環境を豊かにすることもあったのです。

さらに文明の比較研究により、文明には自然環境を破壊する文明と自然環境を豊かにする文明があるのだということも分かりました。ジャレッド・ダイヤモンドは、『文明崩壊』でグリーンランドの 2 つの文明を比較しています。グリーンランドにはバイキングとエスキモーの 2 つの民族がいましたが、グリーンランド・バイキングはノルウェイにいた時と同じく、馬や牛、羊を飼って、農業を行い、生計を立てていました。そのため、徐々にグリーンランドにあった、森、草原、土壌を破壊していき、15 世紀に滅んでしまいます。一方のエスキモーは、住居には毛皮と雪を使い、食料にはクジラやアザラシ、魚など天然の生物を捕獲して、食べていました。バイキングの人は近くに住んでいながら、エスキモーを野蛮だと軽蔑し、その生活様式を取り入れることなく、環境を破壊し、文明の破局を迎えてしまいます。エスキモーも最終的にはデンマーク人に征服されてしまいますが、文明が自然破壊をもたらすことはありませんでした。

ダイヤモンドでもう一つ面白いのは、徳川幕府の森林保護政策を絶賛していることです。徳川幕府も最初から森林保護政策をとっていたわけではありません。江戸の建設には莫大な木材が必要でした。それに明暦の大火で江戸の大半が消失し、再建のために大量の木材が必要とされ、森林伐採が行われると、洪水が起こるようになり、さらに森の腐葉土が使えなくなって、支障をきたしました。以後、徳川幕府は森林の監視を樹木一本に至るまで徹底し、日本を森林国としたと高く評価しています。

私は田中正造も江戸幕府のこのような森林政策を知っていて、「真の文明は」の言葉を書いたのかなと思っているのですが、その点は、本日の赤上先生のお話で詳しく語っていただけるのではないかと考えています。

そして第2番めには、田中正造研究が大きく進んでいることがあります。昨日私はスタディー・ツアーで、荒畑寒村の書いているように、排水機の借金が谷中村の財政破綻を引き起こしたと話しましたところ、立ちどころに赤上先生からそれは違うと指摘され、無知をさらけ出したわけですが、それほど、田中正造研究、谷中村研究は進んでいます。今日は、赤上先生、布川先生、飯田進さんの研究の進展を踏まえて、講師の方々に新しい田中正造像を描き出して頂きたいと思います。さらに、韓国から朴孟洙先生が、東学農民革命のご研究との関わりから、田中正造についてお話いただけることになっています。

田中正造の思想の特徴を、私は、高く、広く、深く、豊かだといっていますが、高い、すなわち高潔であり、高貴であり、高邁であることは、だれも認めるところでしょう。彼は自分のことを度外視して、社会のために全力を尽くしました。広い、というのは地域的な広がりがあることです。正造は恐らく世界全体を視野に収めていたのではないかと考えています。韓国、中国、ロシア、インド、そしてヨーロッパやアメリカを考えていた。そして多くの領域にまたがっています。政治だけではなく、経済、社会、自然、こういったものを包括的に捉えていました。さらに深さ、すなわち彼は運動を通じて、思想を進化させていったと思います。ですから、深い洞察をもって物事を考えました。さらに豊かだというのは、彼はドクマにとらわれず、教条性を排除し、独創的で、創造的であったと思います。

こうした正造の側面はあまり知られていなくて、田中正造というと足尾銅山鉍毒事件、谷中村事件と考えられてしまっていますが、これからの私たちは、広い正造の思想、深い正造の思想に着目し、発掘していくべきではないかと思い、今日のシンポジウムを企画させていただきました。

(新資料の発見について)

あちらに貼ってあります資料についてご説明したいと思います。このシンポジウムの準備のため、田中正造が最後の大演説会を行った赤麻寺に伺い、ご住職で私の恩師の仙田光俊先生に、かつて布川先生の渡良瀬川公害シンポジウムで見たことのある、掲示資料についてお話しました。私は、その資料を所有しておられた高際良一さんのお宅が火事になったので、その資料は燃えてしまったと思うので、残念だ、と言いましたところ、仙田先生は、「確かに母屋は火事になったが、物置は残ったので、あそこに何かあるかもしれないから、聞いてみよう」と言って、早速その日のうちに高際良一さんのお宅にでかけてくださいました。良一さんはあいにく亡くなられましたが、奥さんの高際静さんが対応されて、

翌日、3点の資料をもってこられたと、私に早速電話くださいました。それで再びおじゃますると、確かに以前見たものとは別の資料があり、お借りして、布川先生に見ていただきました。すると布川先生は「これはその時の資料に間違いがない」と言われ、さらに「その時の大演説会の様子が伝わってきて、興奮するね」ともおっしゃいました。それで、このことも含めて、シンポジウムで話してくださるようお願いしたところでした。このことは新聞発表をしましたが、その現物を今日はゆっくり見ていただきたいと思います。

今日のこの会場には、朴孟洙先生と共同研究をされている、奈良女子大学名誉教授の中塚明先生が、はるばるお越しくくださいました。本当にありがとうございます。

それでは、最初の講演に入ります。講師の赤上剛先生は、渡良瀬川研究会の副代表でおられますが、田中正造研究ではほぼあらゆることに精通しておられて、昨日もスタディー・ツアーでその博識ぶりを発揮され、質問にはなんでも答えてくださいました。どうか、ご講演のあと、どしどし質問されるようお願いいたします。それでは赤上先生、よろしくお願いいたします。